第４回東京セミナー

第 4 回「新しい北東アジア」東京セミナー
北東アジアの中の日本－アメリカの視点から

2005 年 1 月 18 日（火）9:30～11:00
東京アメリカン・センター（港区芝公園）

講演者：カート・ウェルドン（米連邦議会下院議員、共和党）
討論者：李鍾元（立教大学法学部教授）
コメンテーター：シルベスター・レイズ（米連邦議会下院議員、民主党）
　　ロスコー・バートレット（米連邦議会下院議員、共和党）
司　会：中川雅之（ERINA 副所長）

【中川】
　ERINA では 2004 年度の事業として笹川平和財団の後援をいただき、「新しい北東ジア・東京セミナー」をシリーズで開催しており、今日がその４回目になります。2005 年という新年を迎え、アメリカでは第２期のブッシュ政権がスタートとする直前ということもございましたので、今回はアメリカからみた北東アジア、そしてその中の日本ということでお話をいただこうという計画を立てておりましたところ、たまたま先ほどご案内のとおり米国の超党派の下院議員訪問団が北朝鮮の核をめぐる６者協議のメンバー国、ロシア、北朝鮮、韓国、そして中国を回ってこられた後、日本に立ち寄られたという機会をいただきましたので、東京アメリカン・センターのご協力をいただき、今回のレクチャー及びパネルディスカッションを開催させていただくことになりました。そして東アジア、なかんずくアメリカから見た東アジアの政策がご専門でこの分野でも大変権威でいらっしゃいます立教大学の李鐘元先生に討論者として参加していただいております。
　まず、ウェルドン団長さんのお話を中心に５か国訪問の結果を報告いただき、それを受けて李先生からコメントをいただきます。

【ウェルドン議員】

代表団を代表してここに出席できることを本当に嬉しく思います。今朝は代表団から他に２人の議員に同席願い、この 10 日間にわたる訪問の印象を合わせて語ってもらおうと思います。

私は、連邦議員というだけでなく教育者でもあり、大学ではソ連・ロシアについて研究しました。ロシアへの訪問は 40 回に上り、中国については、アメリカから中国への技術移転に関するカーツコミッティーのメンバーでもありました。また朝鮮半島にも焦点を当て、14 年前に初めて板門店を訪れ、米国軍人の遺骨を本国に持ち帰りました。日米関係にも積極的で、日本の国会議員とアメリカの連邦議員との議員間の対話にも参加しております。現在、フィラデルフィアのドレクセル大学で国際問題安全保障について教えています。また議会の防衛委員会の副議長を務め、年間 4,300 億ドルの防衛予算の監督をしています。

数年前に北朝鮮が 1994 年の米朝枠組み合意に違反していることを知ったとき、私たちは対話が不足していることを懸念しました。この違反の重要性と意義、地域の各国との友情関係、核ミサイル拡散を懸念して、議会は北朝鮮との対話を始めました。2003 年の５月、８ヶ月にわたる努力の末、超党派の代表団を率いて平壌を訪問する許可を得ました。その時には私の同僚３人が３日間の平壌訪問に同行してくれました。これはアメリカの議員と北朝鮮の指導部とが持つ初めての会合で、当時の最高人民会議の議長と金桂寛外務次官に会うことができました。

話し合いは気取らず率直に行われました。到着時に強調したのは、我々は国の外交政策や６者協議のプロセスを弱体化させるために訪問したのではなく、大統領を代表したのでも、交渉のためにきたのでもないということです。そうではなくて、人間の顔をもったアメリカ、議員として夫でも父親でもある人間としての顔を見せるということなのです。そして朝鮮半島における戦争回避を一番の懸念としているということです。

私には２つ克服しなければならない問題がありました。１つは入国を許してもらうこと、もう１つはアメリカ政府に訪問の許可を与えてもらうことです。北朝鮮はこのあたりの事情を理解し、この訪問がこれまでとは違うことを知り、３日間の協議では具体的でお互いに有益な話し合いをもつことができました。

２日目の朝、眠れないまま午前３時に起きてから、アメリカ大統領が望んでいること、北朝鮮が望んでいることを 10 項目の２つのプロセスに分けて書き留めました。それを翌日、金外務次官に見せてどう思いますかと反応を尋ねました。２つの部分からなる 10 項目を詳しく説明すると、彼は私の顔を見てにっこり笑ってこう言いました。全てに同意はできないが、これは我々が核計画を完全に透明性をもって廃棄するために求めているものと同じだ、と。北朝鮮側は最初の訪問で私たちを非常に気に入ってくれ、２度目の訪問を招請してくれました。私は、次回の訪問のためには、北朝鮮が６者協議のメンバーとなり、第１回目の会議に参加してもらいたいと伝えました。その年の８月、北朝鮮は６者協議の第１回目の会議に参加しました。

秋に再び招かれ、民主党５人、共和党５人の 10 人からなる訪問団を組織しました。しかし、政府内で、空軍機の使用を拒否する動きもありました。北朝鮮側は私たちの訪問に大変積極的でしたので、東京まで飛行機を寄越すからそれに乗って来て欲しい、あるいは非武装地帯を開放するから車で通過してもらえばいいと提案してきました。もちろん、アメリカ政府が非武装地帯を開放するわけがありません。

私たちはブッシュ大統領に反対したわけではありません。私は共和党員ですから、ブッシュ

大統領を支持していますし、選挙運動もしました。同じ共和党のメンバーも協力してくれました。政治的にはブッシュ大統領ではなく今回の選挙でジョン・ケリーを支持した３人の民主党員もこの代表団に入っています。しかし私たちは超党派代表団として一致してブッシュ大統領の外交政策を支持しています。私たちの立場と、ホワイトハウスの立場、６者協議に入っている５カ国の立場に違いはありません。

去年の秋に訪問を計画し、空軍機の提供を拒絶されたことに関しては、いろいろ物議がかもしだされました。国務省の中には私たちを支持してくれる人たちもいましたし、政権の内部で訪朝を反対する人もいました。再び粘り強く辛抱し、2004 年 10 月、アンディ・カード主席補佐官からブッシュ大統領が訪問を支持するという連絡を受け、今日、ここにいるわけです。この２年間、いろいろなレベルの北朝鮮の人たちと話をしました。ジョージア大学の朴博士、ワシントンではジョー・バイデン議員他、様々な機関で討論を重ねてきました。私たちの間には北朝鮮の行為・行動に対して大きな違いはありますが、ブッシュ大統領が平和的解決を求めるというアプローチを全面的に支持しています。

今回の訪朝は到着から離陸までまさに異例でした。我々の望む場所へは、どこでも行けるように取り計らってくれました。平壌市内では４時間にわたりビデオを撮りました。その中にはアメリカの情報機関が決してそのようなことはできないだろうと言った地下鉄もあります。地下鉄や町であった英語の話せる学生たちとも話をしました。1,000 枚以上の写真も撮りました。金日成大学を訪問して教育制度について話をしました。市場で人々と交流もしました。唯一写真が取れなかったのは、皮肉にも統一通り市場の中で、そこには何千人もの朝鮮の人たちが、肉、野菜、食料品、家具、靴、衣料品などを自由に買っていて、外務省の役人は写真をとりたいという私たちの希望を適えようとしてくれましたが、買い物をしている風景は撮って欲しくないという市場のマネージャーの意見に抵抗できず、その市場だけが写真をとれないところでした。

金日成の写真が撤去されているという噂は、事実ではありませんでした。金日成の写真はこれまで通り、あちこちで見られました。平壌の中心街にある交差点の大きな看板にあった写真だけがなくなっていました。それは韓国人兵士の後ろにアメリカ市民が立ち、それに対して北朝鮮兵士が銃剣で胸を突き刺している写真でした。2003 年の最初の訪問時、最高人民会議の議長が、ブッシュ大統領が北朝鮮を悪の枢軸と呼んだことについて、「議員さん、私が邪悪な人間に見えますか」と聞きましたので、「いいえ、邪悪な人間には見えません。大統領は、個人ではなく国の行動について言っているのです。では、私は、胸を銃剣で突き刺したい人間ですか？」と聞き返しました。「どういう意味ですか」と聞かれたので、「北朝鮮の兵士が銃剣をアメリカ人の胸に突き刺している写真のある大きな看板の下を 10 回くらい通りました。私の胸にも銃剣が刺さったほうがいいと思いますか？」と聞きますと、彼は頭を下げて面目を失ったような顔をして「いいえ、私にはそういう意図はありません。」と答えました。その看板は取り払われました。実際、最初に訪れたときにあちこちに見られた多くの反米レトリックの看板は、取り外されていました。

今回の話し合いは圧倒されるほど建設的なものでした。私たちは交渉のために行ったのではありませんので、どういうことが最初に起きるかというニュアンスは話し合われませんでした。

目的は６者協議を再開させることであり、北朝鮮の方では私たちが平壌に来るだけでも非常に困難であることを理解し、私たちが交渉役でも外交官でもなく、外交のための訪問であるということをわかってくれたので、もっとリラックスして付き合ってくれました。金外務次官とは３日間で 10 時間にわたり率直な討論を行いました。金永南最高人民会議常任委員長とも会談しました。この 20 年の間で彼に面会できたのはジム・ケリー次官補、オルブライト国務長官、ウィリアム・ペリー国防長官の３人だけです。90 分にわたる会合は、何かを書くためのものではなく、お互いの対話、真の議論でした。常任委員長は、北朝鮮がアメリカの友人になり、敵対関係を終わらせたいという希望を述べました。外務大臣や李将軍との会合も率直で気取らないものでした。私たちは外交官ではできないことをしたのです。

最初の訪問で金桂寛外務次官と話をした際に、ブッシュ大統領がけしからぬことを言うと怒っていました。アメリカと北朝鮮の関係が気まずくなったのはブッシュ大統領のせいだと言いました。クリントンの方が良かったというわけです。そのとき、民主党の友人が割って入り、ちょっと待ってくれ、そんなことはない、私はブッシュ大統領の再選を支持しなかった、ゴア氏の当選を支持していたが、関係が悪くなったのはあなた方の行動のせいで、98 年８月の日本に向けたテポドン発射、核兵器に関する枠組み合意違反など、そちらの行動から関係がこんな風になってしまったと言いました。外交官というのはなかなか苦労します。民主党の代表が北朝鮮に対して説明しているからです。今は朝鮮半島を良くするために両方の議員が意見を統一させています。

今回、状況は北朝鮮の味方ではないと伝えました。私は日本に対するミサイルの発射を例に挙げています。北朝鮮の行動をみて、アメリカは現在年間 100 億ドルを使ってミサイル防衛システムを作り、同盟国を大陸間弾道その他のミサイル攻撃から守ろうとしています。今年、新しい一連のバンカーバスターという兵器の開発を提案していますが、それはどのようなものかというと、地中を走り、地下の要所や軍事基地を破壊する核兵器です。議会ではこの兵器についてはわずか１票差で否決されましたが、北朝鮮が態度を変えなければ、今年は、北朝鮮の地下設備を狙ったこのバンカーバスター兵器に対する予算が通る可能性がある、と伝えました。新しい議会が始まるとまもなく通過するであろうエネルギー法案についても話しました。これには現在、北朝鮮に対して大統領が自由に資金を使うことができないという条項が含まれています。アメリカ及びこの地域がそのようなことになれば、非常に良くない事態を迎えることになります。

私たちはまた、ユニークな立場にあります。カダフィ大佐のリビアを一つの例に挙げるならば、まさにかつて我々の宿敵でありテロリストのシンボルでありました。私は昨年、リビアに２回参りました。１月に 40 年ぶりに代表団を率いてカダフィ大佐と会談し、ブッシュ大統領の大量破壊兵器撤廃を支持すると伝えました。３月２日、２回目の訪問で私はカダフィ大佐の演説５分前に全土に向かって話をしました。北朝鮮には、「リビアを見てごらんなさい、カダフィ大佐を。私たちはカダフィ大佐もその政権も嫌いだが、カダフィ政権は続いているし、私たちは大佐を解任してもいないでしょう。２国間の関係は正常化し貿易も行われ、経済的な交流もあります。」と。リビアを一つの例として話をし、北朝鮮もこのようにして核兵器開発を止め、周辺地域の中で、またアメリカとの間で新しい関係を結ぶことができるのではないか、

と言いました。

胡錦濤とプーチン大統領は、朝鮮半島における核兵器は許さないと発言しています。日本はアメリカの友人です。正常な関係をもつためには、日本人の拉致問題を解決しなければならないと伝えました。北朝鮮側はこの問題についての回答を避けました。私は、それでは日本へ行ったらそのように発表しますと答えました。私たちの関心事は、核兵器を完全に透明性をもって廃棄することと、日本人拉致被害者の問題解決について協力することであり、この問題に対して、北朝鮮は日本へ直接回答すべきであると伝えました。

この訪朝の最大の成果は、私たちの発言から来たものではありません。いくつか例を挙げてみます。今回の通訳には国務省の大統領通訳のトム・キムが同行し、彼は北朝鮮に 16 回行っていて、オルブライト氏、ペリー氏、ケリー氏の通訳も務めた人です。個人的に、また韓国での記者会見でも発言していましたが、オルブライト氏が平壌を訪れた時代も含めた過去 17 回の訪問の中で、北朝鮮がこんなにオープンで生き生きとして胸襟を開いたことはなかったそうです。きちんとした対話、ディスカッションができた歴史的な訪朝であったということです。彼はちょうど今、国務省に戻ってこの報告をしているところです。

２つ目に、出国前に李根外務省米州局副局長と１時間あまり会談をしました。彼は私と一緒に朝鮮中央通信社（KCNA）のプレスリリースの概要を考えたいと言いました。考えても見てください、私たちアメリカ人の一団が自らの訪朝についての評価を朝鮮中央通信社と一緒に考えるのです。平壌出発前に、私はプレスリリースがどんなものになるかすでに知っていました。ソウルに着いたとき、朝鮮中央通信社はまだプレスリリースをしていませんでしたが、韓国のメディアに「内容はわかっています。私が北朝鮮を離れる前に一緒に相談したのだから。」と言いました。数時間後、私たちはこの発表を見ましたが、異例でまた前向きなものでした。

ソウルでも発表したとおり、北朝鮮は６者協議に戻ると言いました。ただ、タイミングには２つのことを考えなければなりません。まず、まもなくわかる第２期ブッシュ政権の顔ぶれ、そして最も重要なのはワシントンの発言です。北朝鮮は、今週行われるブッシュ大統領の就任演説、２月２日の一般教書演説の内容、今日ワシントンで行われるライス氏の指名公聴会の行方を非常に熱心に見守っています。もしそれらの中で彼らを怒らせるような発言が出ると難しい状況になると思いますが、そういうものがなければ、２月の中国の春節後には会談に戻ると思います。これからもっと代表団のメンバーも増やしてくるのではないかと思います。

最後に、私は北朝鮮とその他５カ国の議員が、できれば３月の後半に北朝鮮で非公式な会合を開くことを考えています。このセミナーは決して政府主導の公式なものではなく、少数の議員がそれぞれの国の様々な立場についてディスカッションや対話を通じてお互いを知ることができればいいと思っています。できれば日本の国会もこれを承認して是非実現したいと思います。夕べ５人の日本のベテラン議員にお会いして、その可能性についても話をしました。

今日の発言の機会を与えてくださった ERINA にお礼を申し上げます。

続いて、同行議員の二人にも意見を聞きたいと思いますが、まず民主党議員で私の良き友人である CIA を監督する情報特別委員会のメンバー、レイズ議員にコメントをいただきたいと思います。

【レイズ議員】

この地域には多くの問題があります。朝鮮半島の核開発の問題は、ただ単にこの地域の国々の問題だけでなく、世界全体に影響する大きな問題です。昨夜、私たちは駐日アメリカ大使と会い、私たちが今回の訪朝で得た成果について話をしましたが、一番大事なことは、議員として訪朝したことだと言われました。議員の役割として重大な外交問題にかかわったことを誉めてくださいました。議員として、また個人的として、見解や政策が違う我々が、アメリカの顔を代表して行ったということを是非、理解していただきたい。これが２回の訪朝で達成した大きな成果だと思っています。65 万人を代表する議員として、異なる経験や背景、政治的な考え方をもっていますが、外交官でも交渉役でもなく、それぞれが個人の経験、考えに基づいて、何を伝え、なぜこういうことが世界にとって大事なのかを伝えに来たことを強調しました。それは信頼と尊敬の念に尽きると思いますし、北朝鮮側からもたびたびそのような発言がありました。

１年半前の最初の会談のときに、北朝鮮はイラクでのできごとを見守り、そこから教訓を学んだと言いました。悪の枢軸の一員というレッテルを貼られたことで、ブッシュ大統領が政権の転覆を望んでいるのではないかと懸念し、核を保有することによって自分を守ることができるのではないかと考えたと言いました。それによって、イラクやサダム・フセインと同じ運命を辿らなくても済むようにということです。正当性のある現実的な問題として言われました。ウェルドン議員も言われたように、北朝鮮側は今回、私たち代表団に対して以前よりリラックスしていましたし、私たちが望んださまざまな場所に案内してくれました。実際、もし 12 月に訪問することができていたなら、核施設の１つにも案内できたと彼らは言っていました。

しかし、２度訪れた代表団員の１人であり、３回目の訪問も約束してきた者として、私たちから見ても、北朝鮮側の視点から見ても、次なる問題はアメリカ国内の政権との取引、交渉だと思います。我々の帰国後２週間ほどで大統領の就任演説が行われますが、この演説はアメリカ国内だけでなく全世界に向けて発信されるものであり、一般教書も同様です。それを北朝鮮は非常に注意深く見ると思います。イラクから学んだ教訓も考えた上で、演説を聞きながら、何か希望のもてる徴候があるかどうか、北朝鮮に対して否定的なメッセージが含まれていないかどうかを、極めて興味深く見守ると思います。

私は議員として面白い経験をさせていただきました。団長にはこうして２度続けて代表団として訪問させてもらったことに感謝すると同時に、これが私たちの政権の政策に影響を与え、６者協議の継続を促せることを願います。苦労も多く、政権内でもいろいろな意見がありますが、私たちは責任を果たす立場にあります。ウェルドン議員の努力のお陰で、昨夜駐日大使が高く評価してくださったレベルまではその責任を果たすことができました。

【ウェルドン議員】

では、今回、北朝鮮を初めて訪れた共和党員で、軍事委員会のメンバーであると同時に 10 人の子どもの父親であり、またジョンズホプキンス大学の研究者で、20 個以上の特許をもつ、バートレット共和党議員にお願いします。

【バートレット議員】

議会でもいろいろなことが話し合われ、意見も出尽くした感があり、まだ誰も言っていないことをいうのは難しいですね。ここでも２人の議員が素晴らしい報告をされました。私からは、あまり話題に上らなかった問題について述べたいと思います。

それは直ちに対応しなければ明日にも空が落ちてくるというわけではないけれども、常に重要で今こそ最優先されるべき問題、ずっと先延ばしにしていると、明日とはいわなくても明後日には空が落ちてくるかもしれないことです。このことを北朝鮮で寒いビルの中に入った時に思いました。エネルギーが不足しているのです。特に石油と関連した世界的なエネルギー問題を考えてみました。

現在、アメリカ単独で世界全体の石油消費量の 25%を使用しています。中国は 20%といわれて、昨年は 30%上がり、これからも上がっていくと思われます。以前、私は議会の科学委員会のエネルギー部会長をしており、エネルギー問題の規模に関して、世界の専門家を集めて２度の公聴会で検討してもらったことがあります。現在、世界の石油埋蔵量は約 1,000 ギガバレルで、新たに発見される油井の数は減っており、今日、発見される石油１バレルに対して消費は６バレルになります。アメリカだけでも１日に 2,000 万バレル、世界では毎日 6,000 万バレルを消費していることを考えると、この世界の確認埋蔵量は 40 年くらいでなくなってしまうのではないかといわれています。また、石油を発見して採掘していくためには、環境にも影響を与えます。今後、私たちの使用に見合うだけの石油が発見できれば、まさに幸運というしかありません。現実としては 40 年分しか残っていません。

石炭は中国、アメリカにたくさんあり 40 年以上持続すると思われますが、石炭を利用する上でのガス化、液体化は、環境に大きな影響を与えます。現在の私たちの石油発見技術は地震学的なものを使った優秀なものですが、1955 年に M. King ハバードという科学者が、アメリカの石油生産量は 1970 年にピークに達し、その後、どれだけ油井の採掘に努力しても減少すると予測しました。世界の 500 万の油井のうち、アメリカ国内で 400 万くらいを掘削していますが、ハバードが言ったことは確かで、1970 年以来、毎年アメリカにおける石油産出量は減っており、油井の発見も減っています。彼はこれを石油のロールオーバーと呼び、世界的にはこのような石油の逆行は 2005 年くらいから始まると予測しました。現在、３～４年前と比べると石油価格は３倍に上り、１バレル当たり 45 ドルで、多少下がったとしても、その後はどんどん上がり、石油の必要量に比べて供給量が減り格差が増えていくということです。

ガスの埋蔵量も石油と同じです。現実的な視点からみて、石油もガスも燃やすにはもったいなさすぎるようなものです。例えば石油化学産業。窒素肥料の大半は天然ガスからきているもので、窒素肥料がなければ食糧産出は需要に追いつきません。

これが北東アジアといったいどういう関係があるのかと皆さんは思われるかもしれませんが、こうした問題は世界が一緒になって対策を立てなければならない問題です。まずエネルギー効率を高めることです。エアコン・冷房の効率は 20 年前と比べると２倍も上がっていますので、そのようにしてエネルギーも効率性を上げることが大切です。

２つ目に、節約です。大型車を運転する代わりに小型車を運転するなど、世界で行われていることを、アメリカでも行うべきです。みんなで代替エネルギーを考えなければなりません。

原子力エネルギーは良いものですが、副産物があります。世界の国々はこうした副産物解決のための研究を合同でしていくべきです。原子力発電が安全裏に使えるようにすることです。

さらに再生可能エネルギーに目を向けるべきです。太陽エネルギー、風力発電、太陽光。農業からもバイオディーゼル、大豆ディーゼル、バイオマス、エタノール、メタノールなどのエネルギー源があります。これは一国だけの問題ではなくて、世界的な問題です。従って、世界の国々がもっと精力的に、これまで以上にこの問題に対応していかなければならないのです。

最初に申し上げましたとおり、今日エネルギー問題を何とかしなくても明日に空が落ちてくることはないけれども、緊急性をもっているということです。訪朝してそのとおりだと思いました。私たちが北朝鮮のいろいろな問題に対応していかなければ、いずれ巨大な問題になるとということで、エネルギー問題はその１つです。

【中川】

ウェルドン議員、レイズ議員、バートレット議員、ありがとうございました。

お話の要点としては、ウェルドン議員からは、北朝鮮が６者協議、対話に前向きであること、今の時点では第２期ブッシュ政権がどういう考えで出てくるかに注目しているということ、日米同盟関係の確認を北朝鮮にしてきたということです。レイズ議員からも同じように信頼が大事だとお話がありました。バートレット議員からは、私ども ERINA でも北東アジアで重要な課題として取り組んでいるエネルギー、環境といった問題についても、国際協調の枠組み、対話を通じて今から取り組まないと大きな問題になるというお話がありました。

これを受けまして、李先生の方から日本の考えも含めて、アメリカがどう考えているかをお聞かせいただければと思います。

【李】

今回の北朝鮮訪問は非常に大きな意味があり、直接お話を伺うと、報道された以上に中身の濃いものであったという印象を受けました。恐らくこれから６者協議の再開に向けた過程で、今回の訪問のさまざまな成果が具体的に現れてくるだろうと思います。

まず大きな印象として、今回はタイミング的に大事な訪問であり、これまで伝わった以上にかなり深い率直な議論がなされ、中身の濃いものであったと感じました。それはウェルドン議員を始め代表団の方々が、形式的な訪問ではなくて、長年の対話の関係を築いてこられた成果だと考えています。

第２点として、北朝鮮の核問題が表面化して 10～15 年経ちましたが、これほど危機が長期化した１つの理由は、ウェルドン議員が繰り返し強調されたように、不信の壁が非常に強くて、対話が足りなかったことがあると思います。今日、対話というお話が何回も出てきたのは象徴的で、これが実態を表しているものだと思います。日本の国会の方とも相談され、３月には関係国の議員のセミナーを持ちたいというお話でしたが、議員外交の重要性は強調してもしすぎることはないと思います。北朝鮮側は、議員外交、世論に対する外交の必要を学習してきている過程にあると思います。

これまでの北朝鮮の外交は、権威主義政権の一つの特徴として、政権の実力者、つまり相手

国で一番力がある人と取引をして、そこで決められたことをその人が実行してくれることを期待するものでした。クリントン政権の 94 年の枠組み合意がいまくいかなかった理由の１つも、核カードを振りかざして政権と何らかの合意に達しても、議会とか世論に対する説得力がなければ、民主主義国家というものは政権のある種の合意だけでは進まないという点に対する北朝鮮の認識が弱かったことにあると思います。核問題を巡る米朝関係や、拉致問題を巡る日朝関係についても、議会、世論がいかに重要なのかを北朝鮮にもっと理解してもらわなければならないと思います。そのためには議員外交は本当に重要であるということを今日のお話を聞きながらますます痛感いたしました。

次に、６者協議の担当者でもある金桂寛外務次官の話として、満面の笑みをたたえながら、アメリカが私たちが核を完全かつ透明性のある形で放棄するようにしてほしいと言ったという点についてお聞きしたいと思います。６者協議の担当者の発言ですので対話の重要性は大きいと思います。ネックとなっている核の放棄というのがどういうものであるのか、その定義と手続き、プロセスがずっと問題になってきたわけですが、その点について、金外務次官を含めた北朝鮮の人との対話に基づくウェルドン議員のお考えをもう少しお聞きしたいと思います。

２点目は、核危機がこれほど長く続いた理由の１つに、北朝鮮側のアメリカに対する不信感や安全保障の懸念が強く、そのために北朝鮮の核に対する執着が強かったことが挙げられます。核を放棄するといいながらも、どういう形で放棄するのかはっきりしなかったので、この核問題がどういう風に解決できるのかが最大のネックになっていました。北朝鮮は核を放棄する意志がある、あるいは今回積極的な態度だったというお話ですが、長い経過とウェルドン議員の長い観察の中で、今の北朝鮮の変化が本当に計算されたかけひきなのかどうかを判断できるかお聞きしたいと思います。アメリカが持ちかけているようなグランドバーゲン、完全な廃棄と関係の成熟化というものに対する戦略的な態度の舵をきったのかどうかを改めてお聞きしたい。

もう１つ障害があるとすれば、拉致問題だと思います。核問題は放棄を決めれば道筋が見えてくるところがありますが、６者協議の成功、核問題の完全な解決のためには、日朝関係が非常に大事だと思います。日朝関係を進展させて正常化するためには、拉致問題は避けて通れない状況になっており、日本は非常に難しい状況にあります。北朝鮮のこれまでの対応があまり誠意のあるものとはいえない状況の中で、日本国内では経済制裁論や強硬論が高まっていますが、それが効果のある状況でもないので、日本にとってはジレンマです。これほど世論が集約されているなかで、日本政府がすぐ６者協議とか核放棄協議の進展に積極的に加わるというのも難しい状況であり、拉致問題をいかに解決するかは、日本国家だけではなく、アメリカを含めた関係国が、北朝鮮に拉致問題に関する真摯な態度、信頼にあたる態度をどのように示すのかフランクに働きかける必要があると思います。

またバートレット議員がおっしゃったように、エネルギー問題での協力は大事な課題ですから、それに取り組むためにも、早く拉致を突破して関係を進展させなければならないと思います。

【ウェルドン議員】

李先生、素晴らしいコメントをありがとうございました。核計画に関しては、１年半前の最初の訪朝の時に、核兵器と核能力の保持を認め、核燃料再処理加工を行っていることを認めました。その時には、これらの兵器を放棄する可能性もあると言っていました。今回もまた同じテーマについて語られました。アメリカはダブルスタンダードを持っているではないか。我々が抑止力のための核兵器を持つことは好まない、しかしインドやパキスタン、イスラエルに対してはどうなのか。こうした国々には抑止力の核を許しながら、我々にはそれを許さないのは何故なのか、という質問をしてきました。

しかし、このような質問や核開発を認める発言にもかかわらず、彼らが何度も繰り返したように核放棄について真剣に考えていることを私たちは確信しました。彼らは、アメリカが先制攻撃をしないという保証がほしいのです。北朝鮮はアメリカがサダム・フセインに対して行ったことを心配しています。また、大統領が体制の交代を望まないということの保証も求めています。最終的にはエネルギー、金融などいろいろな形で国民に支援ができる経済的支援を求めています。北朝鮮側は、繰り返しアメリカと北朝鮮は友好国になれる、と言っていました。「フレンズ」というかつて聞いたことのない言葉です。それは、誰がいつ何をするかという連鎖の問題から、簡単なことではありません。彼らは確かにアメリカと北朝鮮を取り囲む国々に不信感を持っています。中国が一番影響力を持ち、実際、私たちが北朝鮮を出た翌日、北京で外相と話をしたときに、外相はすでに北朝鮮から私たちの訪朝を前向きに積極的に受け入れたというブリーフィングを受けていました。しかし北朝鮮は中国さえも信頼していません。この地域の各国すべてに不信感を持っています。そして最終的にはアメリカとの友人関係を求めていることを私は確信しています。

日本との関係には、確かに拉致問題という難しい問題があります。拉致問題については、日本だけでなくアメリカの問題でもあると伝えました。日本は私たちの友人、同盟国、パートナーであり、日本国とその国民にとって拉致問題はこれだけ重要ですから、アメリカとその国民にとっても重要なのです。北朝鮮側は、拉致問題に関して日本に対応しなければいけないというメッセージを明確に受け止めたと思います。北朝鮮側は回答をしなかったので、何をどうするという具体的な話にはなりませんでした。しかし、私たちは、日本がこの問題を一国も早く解決したがっていることは理解できます。

昨日、私たちは国会議員の方々と、どうすればアメリカがその一助となれるかについて意見交換をしました。問題を提起することはできますが、まず、日本が何を望んでいるかについて、具体的なゴールをはっきりさせなければなりません。８人か 10 人か 100 人か、どれだけの人たちの報告が欲しいのかをはっきりさせれば、アメリカと日本とが一緒になってこの問題を提起することができます。外務大臣よりこの問題に関する資料をいただくことになっていますので、ワシントンに持ち帰ります。

一連の問題解決については、配付資料の 10 項目の提案をご覧ください。まず、北朝鮮は核の放棄を正式に発表し、地上と地下における核の能力をすべて放棄し、完全で透明な査定を受け入れます。これに１年くらいかかります。そして核拡散防止条約に戻ります。同時に、アメリカは大使館ではなく事務所を平壌に置き、少なくとも１年間もしくは査定が完了するまで、北朝鮮が同盟国・近隣国を攻撃しない限り、アメリカは先制攻撃をしないことを大統領が保証

します。さらに、アメリカは５カ国と北朝鮮が経済政策のための話し合いを始めることを発表し、第２段階で実行に移されます。これらを同時に進めます。

第２段階では、北朝鮮の協力により核施設へアクセスできるようにします。そしてその他５カ国の資金で協調的脅威削減計画を行うことを発表します。これはアメリカが資金を出してロシアの大量破壊兵器の解体を図っているのと同じようなもので、これを北朝鮮に対して行います。それと同時に、北朝鮮の恒久承認をし、正常な関係を樹立します。また、大統領の１年間の安全保障を恒久にします。もちろん、もし北朝鮮が周辺国を先制攻撃した場合、私たちは防衛のための行動に出ます。

これらの保証を得た北朝鮮は、ウィーンにある欧州安全保障・協力機構（OSCE）のヘルシンキ委員会のオブザーバーとなり、人権問題の進展を図ります。また、ミサイル関連技術輸出規制管理（MTCR）に入り、ミサイル技術を他国に売却しないという確約をします。そこで最終的に正式に支援政策がとられ、議会と政府が協力して、農業、医療、教育、環境、エネルギーなどの分野で実施していくための資金計画だけでなく、NGO や大学と協力していくための体制も作っていきます。私たちが 2001 年にロシアに対して作ったものと同じようなものです。この包括的計画は「ニュータイム、ニュービギニング」と呼ばれ、拡大協力の 11 分野 108 の提案からなります。表紙にはバイデン上院議員、ラビン議員、ルーガン議員、私が署名し、議会の３分の１の承認を得て、ブッシュ大統領とプーチン大統領に提出しました。リベラルな民主党、保守的な共和党すべてが、ロシアと新しい関係を進めるべき時であるという点で同意しました。

第２段階では、議会は韓国と日本、中国の協力を得て、北朝鮮における相互関係のレベルを NGO や大学や保健機関、政府間同士に広げます。２部門 10 項目のプロセスで、みんなが望んでいることの達成が可能になるわけです。拉致問題をめぐる日本と北朝鮮も平和的な解決が可能になります。日本側から最後の回答がありしだい、今後の北朝鮮首脳との会談に活かしたいと思います。

【フロア質問】

ウェルドン議員に伺いたいのですが、韓国と北朝鮮の中国とアメリカに対する姿勢に関して、韓国の大統領周辺がずいぶん北朝鮮に傾いていると報道されていますが、そこをどういう風にお考えになっていますか。そして、北朝鮮が実はアメリカ・日本を頼りにしていて中国を怖がっている、ところが韓国の方はだんだん中国と北朝鮮に傾いてきてアメリカとの関係が変わりつつあって逆の現象が起きているのですが、そのあたりをどのように評価していますか。

【ウェルドン議員】

もちろん韓国の人とその政府を代表してお話をすることはできませんが、印象として申し上げます。私たちがソウルに到着して韓国外務省で開いた記者会見には、150 人の報道陣と 35 台のカメラがきていました。私たちの声明文に対してメディアの人たちから拍手が出ましたが、このような記者会見を経験したことがありません。韓国は解決策を見つけたいという印象を受けました。日本同様、大量破壊兵器を含む数千ものミサイルが即座に首都ソウルを攻撃する可

能性があるという状況ですから、フラストレーションもありますが、明らかに危機を解決したがっています。６者協議に対しては大筋で賛成していますし、その役割も支持しています。彼らが心配しているのは、アメリカが激しい言葉遣いをし、北朝鮮の反発を招くのではないか、ということでした。私たち６人はその通りだと答えました。このレトリック、悪口を言うこと、はどのような難しい状況に対しても、最大の敵に対してもうまくいきません。ワシントンに戻って、このような言葉遣いは止めるべきだと伝えなければなりません。そして真剣な対話をしなければいけません。誰も戦争という選択肢を望んでいないからです。

経済封鎖については、アメリカ国内でも日本でも必要だという声がありますが、過去に経済封鎖がうまくいった試しがありません。キューバのカストロ政権に対しても、イラクに対しても同様です。アメリカが経済制裁をすれば、金正日は何らかの形で収入を得るでしょう。核技術が情勢の不安定な国やテロ国家に流れていくということがあるでしょう。麻薬の密輸やミサイル技術を磨いていくに違いありません。我々がいずれもっと劇的な対策を取らなければいけない日が来るであろうという点で、韓国の人たちも同じ意見だと思います。アメリカでその日は近づいていると北朝鮮側に伝え、いくつかの具体的な例を示しました。例えばバンカーバスター攻撃に対する膨大な防衛費、アメリカの資金の使用を禁止するエネルギー法案、より過激なアプローチを支持する議会メンバーの懸念。５カ国が一緒に取り組まなければならないと思います。他の国々との間に亀裂が生じれば、解決はいっそう難しくなるでしょう。

また日本の拉致問題を慎重に扱わなければなりません。日本にとって特に大きな懸念は拉致問題です。私たちは今後も拉致問題を第一の課題として考えなければならないと思います。日本だけでなく、他の国もアメリカも、それを優先課題として考えなければならないと思います。

今年、必ず前進があると思います。北朝鮮に対して相手を怒らせるようなアプローチを取れば、違う方向に行くでしょう。中国も同じように、これは歴史的なチャンスであると言っています。私たちが平壌を離れる前に、この歴史的な瞬間を活かさなければいけない、と言いました。その通りだと思います。我々はアメリカに戻って政権に働きかけます。正しいアプローチが取られるように、大統領が支持してくれるようにもっていきます。

【フロア質問】

北朝鮮でインフォーマルなミーティングをしようということですが、それはどこまで浸透しているのですか。

【ウェルドン議員】

これは、現駐米韓国大使であり韓国のメディアのリーダーでもある韓氏と、大使就任前の昨年 12 月に、ワシントンでランチをとったときに出たアイディアでした。その時に彼はそのようなセミナーをするのであれば自分の組織が資金を出して金剛山でやろうと言いました。政府が資金を出すのではなく、この場合はメディアですが、個別の組織が資金を提供する形です。私たちは６者協議に介入・干渉するようなことはしたくない、するべきではないと思います。しかしセミナーを開くことにより、レイズさんやバートレットさんや私のような人間が、北朝鮮の最高人民会議常任委員会の人たちを含めて、他の５カ国の議員のリーダーと近づきになる

ことができ、もっと相互理解を深めることができます。ディスカッションを行い、各国政府とのフォローアップができます。橋をかける作業が始まります。橋をかけていけば理解も深まっていきます。対話をすることで失うものはありません。会ったこともない相手には、簡単に言葉で攻撃し悪口を言って誹謗することができますが、会ってしまうとそういうことは簡単にはできなくなります。３月末に平壌への訪問と共に金剛山でセミナーをすることを望んでいます。具体的なことはまだ決まっていませんし、日本の国会議員の支援も昨夜求めたばかりです。

【フロア質問】

前回の訪朝から１年半経ち、今回は非常にオープンだったということですが、その間アメリカの議会では北朝鮮人権法が通りました。北朝鮮人権法が北朝鮮にそういう態度を与えた、影響したのではないかとも思われますが、その点についての評価を伺いたいと思います。

【ウェルドン議員】

何の影響もありませんでした。彼らの態度が変化したことにこの法案の通過は何の影響もありません。私の同僚の意見も聞いてみますが、私たちは法案に賛成し、彼らはそれに対してあまり歓迎しなかったと思いますが、今回のこととは関係ありません。

彼らの態度が軟化したのは、私たちが自国の政府内の対話を望んでいない人たちと戦って来た、これまでと違う訪問団であると思ったからです。人権問題に対する反応であったならば、私たちの前にラントス議員に対して北朝鮮訪問を許可していたと思います。ラントス議員の発表では、北朝鮮は６者協議には戻らないということでした。私たち超党派の議員の努力が違ったのだと思います。私たちの尊重の気持ちによって北朝鮮が心を開いたのだと思います。北朝鮮が行っている行動を全て尊重するということではありません。私たちはばら色の眼鏡をかけて北朝鮮を見ているわけではありませんが、人間として尊重しているのです。

【レイズ議員】

法案の成立によって、私たちが北朝鮮側に伝えてきた、残された時間はあまりない、という話が強調されたと思います。今年の議会ではもっとチャンスが生まれてくるだろうと思います。ただし、その過程で北朝鮮に対してマイナスの課題も出てくるかもしれません。時間はなくなりつつあるということが強調されたと思います。

【バートレット議員】

１つ簡単に申し上げますが、私は構造化された外交対話は、コミュニケーションというよりは、一方通行の通告に終わることが多いような気がします。私たちはフレンドシップの精神をもって、自分たちの子どもや孫が戦争の被害者になる状況を避けたいと願う祖父や父が話し合うように接してきました。記者会見でのいくつかの言葉がそれを証明しています。

北朝鮮は記者会見で、これまでの不快な過去について繰り返すのとは違って、国内問題に対して干渉や誹謗中傷がなければ、アメリカに対して反抗的な態度をとることなく、友人として尊敬をもって接すると言っています。我々は政府を代表する外交官ではなく、人間として、65

万の選挙区を代表して行きました。外交官が相手では見えにくいアメリカの顔を北朝鮮に見せたと思います。もちろん外交官にも演じる役割がありますが、私たちは、議員として重要な役割を演じることができたと思います。

【フロア質問】
　日本の経済的な制裁に関してウェルドンさんにお聞きします。日本が経済制裁を課したら多国間努力を脱線させる可能性があると思いますか。

【ウェルドン議員】
　私は日本の人たち、政府に代わって発言をするつもりはありません。影響のほどはわかりませんが、日本は国民にとってベストだと思うことをするべきであり、それを私は支持します。私はアメリカが現時点で経済制裁を課すことには反対です。金正日が愚かな行動に走りかねないからです。小さな動きが戦争の始まりになることもあるのです。短い期間で金正日を対決的な姿勢に押し込むようなことはしない方がいいと思います。そこから軍事的な対決がありうるからです。アメリカの視点から見ると、アメリカが経済制裁を加えるというのは、現時点では反対します。繰り返しますが、日本は日本がベストだと思うことをしなければならないでしょう。北朝鮮と２国間の対話をお持ちです。日本が何をすべきかということに関してはコメントしません。日本の行動を支持します。日本はアメリカの同盟国であり、友好国であるからです。

【フロア質問】
　朝鮮中央通信社は日本の報道に対して非難をしております。次の６者協議のときに拉致問題を取り上げるのは反対だと。もしその態度を続けるならば、どのような多国間対応にも参加しないというようなことを伝えております。北朝鮮の主張のように日本は６者協議で拉致問題を出すべきではないのでしょうか。

【ウェルドン議員】
　難しい質問ですね。日本は北朝鮮との間で２国間のディスカッションを続けていますので、日本はアメリカの支援を受けて、強力に２国間問題として追求するべきだと思います。
　私たちが平壌にいたときに、いくつか日本については否定的なコメントが出ていました。拉致問題については非常に態度を硬化させました。日本にとっては大切な問題なので交渉は続けるべきだと思います。朝鮮中央通信社の発表について私たちは聞いていませんのでわかりませんが、是非、日本には積極的に２国間の交渉として解決を目指し、私たちは６者協議の再開を目指します。私たち訪問団員は人権問題議員連盟のメンバーでもあり、北朝鮮の人権にも懸念を持っています。過去に起きた拉致問題のような事件には腹を立てています。12～14 年ほど前に板門店から朝鮮戦争で戦死した兵士の遺体を引き取って棺をハワイに運んできましたが、ハワイに着いてみたらアメリカ人の兵士の遺体ではなく、いくつかは人間ですらなく動物の死体でした。とても頭に来ました。愛する人を失った人たちは、愛する人たちの遺体が戻ってき

たと信じていたのです。でもほとんど違っていたのです。

しかし最も重要なことは、核問題を解決しなければ他の議論はない、戦争しかないということです。もっと大きな人権問題が起こるでしょう。例えばソウルに武器が打ち込まれたら、数十万人が殺されるでありましょう。東京が狙われても同じことです。アメリカ人権問題議員連盟のメンバーの１人として、強力な人権問題支持者として、核問題を解決するためには協議を再開させなければいけないと思っています。それを踏まえてアメリカは人権保護を非常に大事にしているということを伝えながら、この問題を引き続き取り上げていきます。非常に難しいことではありますが、この方針を政府に報告します。日本、韓国にとって直接的な脅威であり、両国に駐留している米軍にとっても脅威でありますから、核問題を解決しようと。拉致問題は日本が積極的に解決を目指すべきだと思います。

【フロア質問】

北朝鮮は日本が経済制裁をすることについて何か言及したでしょうか。また金正日総書記とはこれまでに会われていないと思いますが、会う可能性について何か話はあったでしょうか。

【ウェルドン議員】

はい、次に代表団を連れてきたときには金正日と面会をしようとはっきりと言いました。今回は行く前に金正日には会えないと言いましたが、次回は金正日と会える、と強調していました。

日本の経済制裁そのものについては話し合いわれませんでした。日本の場合は、拉致問題が一番大きいと思ったからです。それに関して北朝鮮側からは反応がなかったので、それ以上続けませんでした。日本のことについては私たちが話すのではなく日本から話すべきだと思うからです。特に私たちは北朝鮮とアメリカの関係について焦点を当てるべきだと思ったからです。

【フロア質問】

外交問題で一般的な質問があります。議員外交がどれほど効果的なのかという一般的な手法について最初に冒頭で触れられましたが、もう一度ご説明いただけますでしょうか。３点の面から考えられると思います。

第１には民主党と共和党の議員が、ホワイトハウスと協力し、国務省と協力するというプロセスを経ることで、自由な活動が拘束されるようなことはないか。

２点目としては、相手国、金正日なりカダフィなりは、議員外交の重要性を認識し学習しているのか。彼らは議員外交のメッセージを受け取っているのか。

最後に議員外交を通して１枚岩と言われる北朝鮮とか独裁的な国の中に意見のばらつきがあるということを発見できるのか、議論を進める糸口を発見できるのか、そういう一般的な質問が浮かび上がってきましたが、ご説明いただければと思います。

【ウェルドン議員】

私たちは今のご指摘について大変神経を使っています。

訪問団は最初のメッセージで、大統領の代表ではないということを言います。次に交渉のためにやってきたのではないと言います。私は 18 年間の議員生活の中で、80 回の代表団を率い、そのうちの 40 回はロシアに行きました。アメリカは憲法を誇りにしています。私たちには王様、首相はいません。行政府の長たる大統領がいます。行政府が立法府よりも上ということではありません。憲法によって、この２つはこれまでずっと対等です。大統領は外交政策を決めます。国務長官がそれを実施します。予算を提供するのは大統領ではなく議会だけです。外交政策を法制化できるのも議会です。例えば、人権法も私たちが作りました。議会は外交政策が本当にアメリカの目的に適うかどうか、常に行政府のやり方をモニターしています。この力の均衡が、アメリカを偉大な国にしたわけです。私たちは議会の役割をあきらめようとは思いません。それは私たちの正当な権利と責任であると思います。駐日アメリカ大使夫妻はいずれも、元上院議員で、私たちが役割を果たしたことを喜んでくださいました。ただ、１枚岩の政府はアメリカを理解しないかもしれない、けれども、それを説明するのが私たちの役割ではないかと思います。

金次官との 10 時間の話し合いは、まるで政治学入門の授業のようでした。彼からは、アメリカの政府はどのような仕組みになっているのか、議会における民主党と共和党の違いなど、いろいろな質問が出ました。これを説明するのには良いチャンスだったと思います。訪問団には民主党の議員も入って、大統領の政策として北朝鮮に核兵器をあきらめるように働きかけています。バンカーバスターは、１票差で支持されませんでした。議会はミサイル防衛を支持しました。実際、クリントン大統領の時代からミサイル防衛を始めましたが、支持されませんでした。議会は憲法によって定められた役割を演じますが、とても重要です。どの議員も自分自身を政府の役割を演じているような発言をする人はいません。大統領の代わりの話をする人はいません。議員は自分の役割をよく承知しています。議員外交によって外交官が実現できないことができると思います。外交官がテーブルをはさんで交渉して、金次官に、例えば新しい議会の構成はどうなっているのか、委員会の役割は何なのか、と聞かれても、外交官は答えられないでしょう。民主党がどのような立場を取っているのか、それに答えられるのは民主党の議員だけだと思います。私は議員外交を強力に支持しています。もちろん制限はありますが、外交政策は統一されています。この２回の訪朝には共和党議員、民主党議員が３名ずつ入りましたが、大統領の政策を全面的に支持しています。その点について私たちの間に異論はありません。大統領及び国務長官が言ったことに反対するつもりはありません。しかし、議員には独自の訪問をして自分たちの努力をするという正当な理由があると思います。

【フロア質問】

アメリカの議員さんがどういう方かと思ってきました。大変率直かつ迫力あるお話に感銘を受けました。ウェルドンさんが経歴にある消防士としての努力をされていることに感銘を受けます。北朝鮮の場合は対話で解決したいと言われますが、イラクの場合はウェルドンさんが避けたいと言われる戦争になってしまいました。ウェルドンさんはブッシュ大統領を支持しているわけですが、その辺のウェルドンさんの心中はどうでしょうか。

【ウェルドン議員】

私は消防士であることを誇りに思っています。故郷では教員でしたがボランティアで消防士長をしてきました。イラクに関して大統領が軍事力を使ったことに対しては支援をしています。私の同僚は大統領のイラク攻撃を支持しませんでした。それはそれで私は尊敬します。サダムの行動に関して 17 の国連決議が採択されました。サダム・フセインが大量破壊兵器を持っていたことは疑うべくもありません。国連でも彼が化学兵器を使って２万人のクルド人を殺したことが文書化されています。彼がイラン人に対して化学兵器を使ったことは明らかです。それは事実です。私にとっては証拠があるかどうかは問題ではなく、彼が持っていた、そしてそれを使った、ということが重要なのです。ですから大統領を支持しました。あらゆる努力をして外交的な解決を見出したかった。しかし、決議にもかかわらずサダム・フセインは公然と国際社会を無視しました。そして今、石油食糧交換のプログラムでも、経済制裁を解除させるためにたくさんのお金も注ぎ込んでいました。戦争になったことは残念です。私は議員として、また国防委員会の副委員長として、外交政策の失敗だと思います。イラクの場合は、最終ポイントに達したと思っています。私の良き同僚レイズ議員は大統領を支持しませんでしたが、採択後の決議は非常に強く支持しましたね。

【レイズ議員】

投票はとても大変で、戦争を支持するかしないか、どちらに投票するかはそれぞれの議員に任されていました。私も戦争は外交政策の失敗であるとみなしています。この決議には反対でした。私は情報委員会の委員ですが、戦争の理由となった大量破壊兵器の問題が２年経ってなかったと言われていますが、ああいう決断がなされた限り、私は議員のメンバーとして、制服を着て現地で戦っている人間を支持しなければいけない。彼らが不足なものがないように、できるだけ安全に帰国できるように、そのためにあらゆる努力をしなければいけないと考えています。

残念ながら 1,400 人の人たちを亡くしました。イラクでは戦争の実行においてずいぶんミスも犯しました。これからも代償を払いつづけることになると思います。

【フロア質問】

答えていただける方ならどなたでもいいのですが、今からワシントンに帰られて北朝鮮とのダイアログをプロモートするにあたり、オブスタクルがあると思うのですが、それは誰であり何であるか答えていただけるとありがたいです。

【ウェルドン議員】

私をクビにする気でしょうか。アメリカでは選挙民以外の人が私をクビにすることはできませんので、ワシントンの人が何と言おうと気にする必要はありません。選挙民にだけ応えればいいわけです。選挙民は私のしていることをよく理解して支持してくれています。ですから私たちは推し進めます。政権内の一部には、私たちの対話路線に反対する人がいます。名前は言いません。でも私たちの行動を見ていていただければ誰かわかります。でも支持してくれてい

る人もいます。２番目のリビアの訪問から帰国したときに、パウエル国務長官はカダフィのスピーチも良かったが、あなたのスピーチは卓越していたと言ってくれました。国務長官がそんなに簡単にいくことはできませんでした。私たちの方がリビアに行くのも個人的な話をするのも動きやすかったということです。

私は政権の一部が憲法をよく理解していないというのはがっかりです。アメリカの政府は人々のための政府ではなく、200 年以上あり続けた憲法に従う政府で、その憲法によって議員には定められた役割が与えられています。私たちはその役割を演じ続けます。反対する人がいたら、気をつけろと言いたい。私たちは粘り強く、止めることはしません。どんな結果になるのかよくわかりません。核のホロコーストがこの北東アジアにあるというのは許せません。私たちはこれからも努力を続けます。反対する人がいれば、止めてみろといいたい。これまでのところ、まだ止められていません。

どうもありがとうございました。